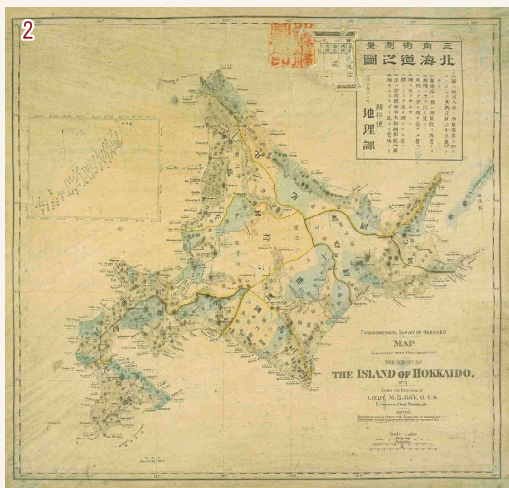


北海道地図作成の原点

かいたくし さんかくそくりょう ゆうふつ きてん

# ③ 開拓使三角測量勇払基点



現在では、地図作成技術の発達や閲覧環境の整備により、インターネットや地図アプリなど様々なところで手軽に地図を見ることができる時代になりましたが、そもそも、日本地図はいつできたのでしょうか。最も古い日本全土の地図は、伊能忠敬が江戸時代後期の寛政12（1800）年から17年かけて歩いて作ったものといわれています。文政4（1821）年に完成した「大日本沿海輿地全図」は伊能図とも称され、それまで各地域で作られていた地図に比べ、飛躍的に進歩した地図でした。その後、伊能図をもとにした日本地図が次々と作られ、部分的には昭和の初めまで使われていたと言われています。

## 開拓使三角測量勇払基点

北海道指定史跡 昭和42（1967）年3月17日指定

所在地：苫小牧市宇勇払132番地49

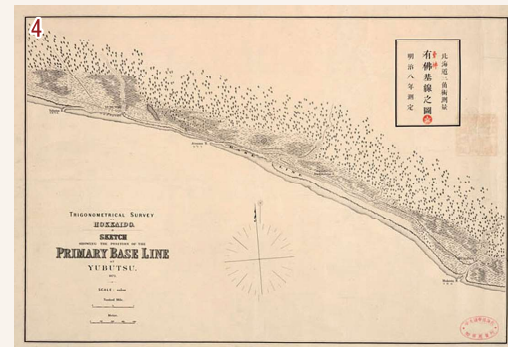
所有者：苫小牧市

管理者：苫小牧市教育委員会

明治に入り北海道では、道路や鉄道建設などの開発に向け、正確な北海道の地図が必要となります。開拓使は、当時の最先端技術であった三角測量法で北海道地図をつくるため、明治6（1873）年3月、アメリカ人のジェームズ・アール・ワットソンを測量長に命じ、荒井郁之助ら日本人たちもその仕事に携わり、地図づくりを開始しました。ワットソンは当初、石狩川上流域に基点を定めようとしたのですが、ちょうど良い土地がなく、勇払と鶴川間に基点を設定し測量を開始しました。

翌年4月にワットソンは異動になりましたが、助手のモルレー・エス・デーを昇格させ測量を続けました。デーたちは、勇払と鶴川の基点を結んだ約14kmを基線として設定し、この基線から全道に測量をすすめ、北は利尻島から南は道南地域まで、北海道の約5分の2をカバーする地図を作成しました。作成した地図は、明治8（1875）年「三角術測量北海道之図」として発刊され、現代に伝えられています。また、このとき三角測量に従事した荒井郁之助ら日本人技術者は、その後の日本全国で行われた、大三角測量事業において指導的な役割を果たしており、勇払基点から始った測量事業は、北海道開拓に大きく貢献しただけでなく、日本の地図作成にも多大な影響を与えることとなりました。

昭和37（1962）年6月、勇払地区の人々が発見した勇払基点は、今日まで大切に保存され、現在は勇払ふるさと公園内に銅牌（指標）の付いた花崗岩の石柱が埋められています。この勇払基点は北海道開拓使史上・我が国の測量史上、貴重な史跡となっています。私たちの生活に必要不可欠な北海道地図、その第一歩を示した証がこの地にあるといえるでしょう。



### 写真の解説

- ① 測量隊の様子。左端がモルレー・エス・デー、その右隣の馬上にいるのが荒井郁之助（苫小牧美術博物館蔵）
- ② 「三角術測量北海道之図」明治8（1875）年三角測量によって作成された北海道地図（北海道大学蔵）
- ③ 昭和37（1962）年、発見された基点の写真
- ④ 明治6（1873）年開始された北海道測量の基線図「北海道三角術測量勇払基線之図」（北海道大学蔵）
- ⑤ ⑥ 基点はガラスケース内に保管され、実物を見ることができる。勇払ふるさと公園に隣接する広場には、基点について説明する石碑が建てられている。また、石碑の間には、復元された標石が置かれている。
- ⑦ 目標台（やぐら）の1/6 模型（※苫小牧市美術博物館の常設展内にあるため、ご覧になるには入館料が必要です）